

中古文学会関西西部会第六十一回例会 発表要旨

一 室町中期における『源氏物語』の注釈態度―第三部の呼称不審に着目して―

大阪大学(院)・日本学術振興会特別研究員 川渕 紗佳

『源氏物語』では、登場人物の年齢や呼称・官位の言及において、他の場面の時間軸と整合性が取れない部分が存在する。特に、第三部は年立の把握が困難である。その理由として、登場人物の呼称が、推定できる物語の時間軸と一致しないことが挙げられる。この『源氏物語』第三部の呼称不審は、古くから問題視され様々な解釈が試みられてきた。本発表では室町中期の注釈書を中心に取り上げ、どのように物語の矛盾を解消しようとしたか提示する。

二 『在明の別』の構造についての一考察―『源氏物語』変奏を中心に―

広島女学院大学 小松 明日佳

『在明の別』は、平安末期から鎌倉初期に掛けて成立した三巻からなる物語である。巻一では男装の姫君である右大将が中心となり、巻二以降では右大将の表面上の息子である左大臣が中心となる。本発表では、巻二冒頭で左大臣に使われる「あやにくなる御癖」という表現を起点に、『在明の別』の構造が、『源氏物語』を如何に変奏して形作られているか、その変奏から窺える本作品の志向とは何か、を明らかにすることを目指す。

三 『うつほ物語』前田本系統本文再考

天理大学附属天理図書館 高橋 諒

現行の『うつほ物語』諸注釈書では、底本が尊経閣文庫蔵前田家十三行本(以下、前田本)であることは共通するが、対校本は異なる。その一因として、前田本を除いた『うつほ物語』諸本の本文が詳らかでない点が考えられる。本発表では、現存四系統のうち最有力系統である前田本系統諸本の本文を検討し、その系統がさらに三種に類別される点を明らかにする。また、それに基づいた新たな系統図を想定し、従来の系統論の見直しを図る。